

いしほら
石原遺跡(本発掘調査B)

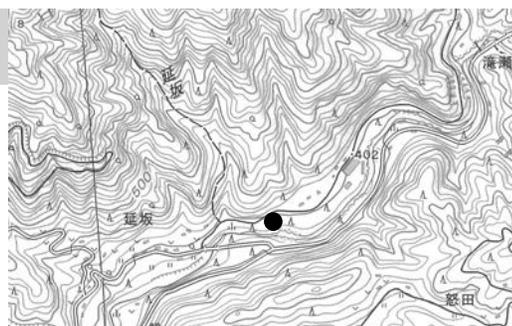
所在地 北設楽郡設楽町川向地内
(北緯35度06分55秒 東経137度34分22秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和元年5月～令和元年11月

調査面積 6,800㎡

担当者 酒井俊彦・武部真木・田中良



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境 石原遺跡は、豊川上流の境川右岸に所在する(川向地区)。石原遺跡とその周辺では、主に境川右岸に発達した河岸段丘および沖積地からなる平坦面や緩斜面が分布しており、やや開けた谷地形となっている。上流部の左岸域に立地するマサノ沢遺跡では、平成29年度の発掘調査でハート形土偶が出土している。石原遺跡は、隣接する下延坂遺跡とともにマサノ沢遺跡の対岸に位置し、その範囲は、標高394～403mの緩斜面を中心に一部は北側の斜面(標高405～418m)にも及んでいる。これらの遺跡は、平成28年度に当センターによって範囲確認調査が行われている。

調査の概要 今年度は、町道より北側の19A区、町道より南側の19B区、その南西の19C区にて調査を実施した。19A区と19B区では、上位の山からの何層にも及ぶ大規模な土石流を検出した。19C区では、境川寄りの低い谷地形から縄文時代後期末から弥生時代前期までの遺物包含層を検出した。

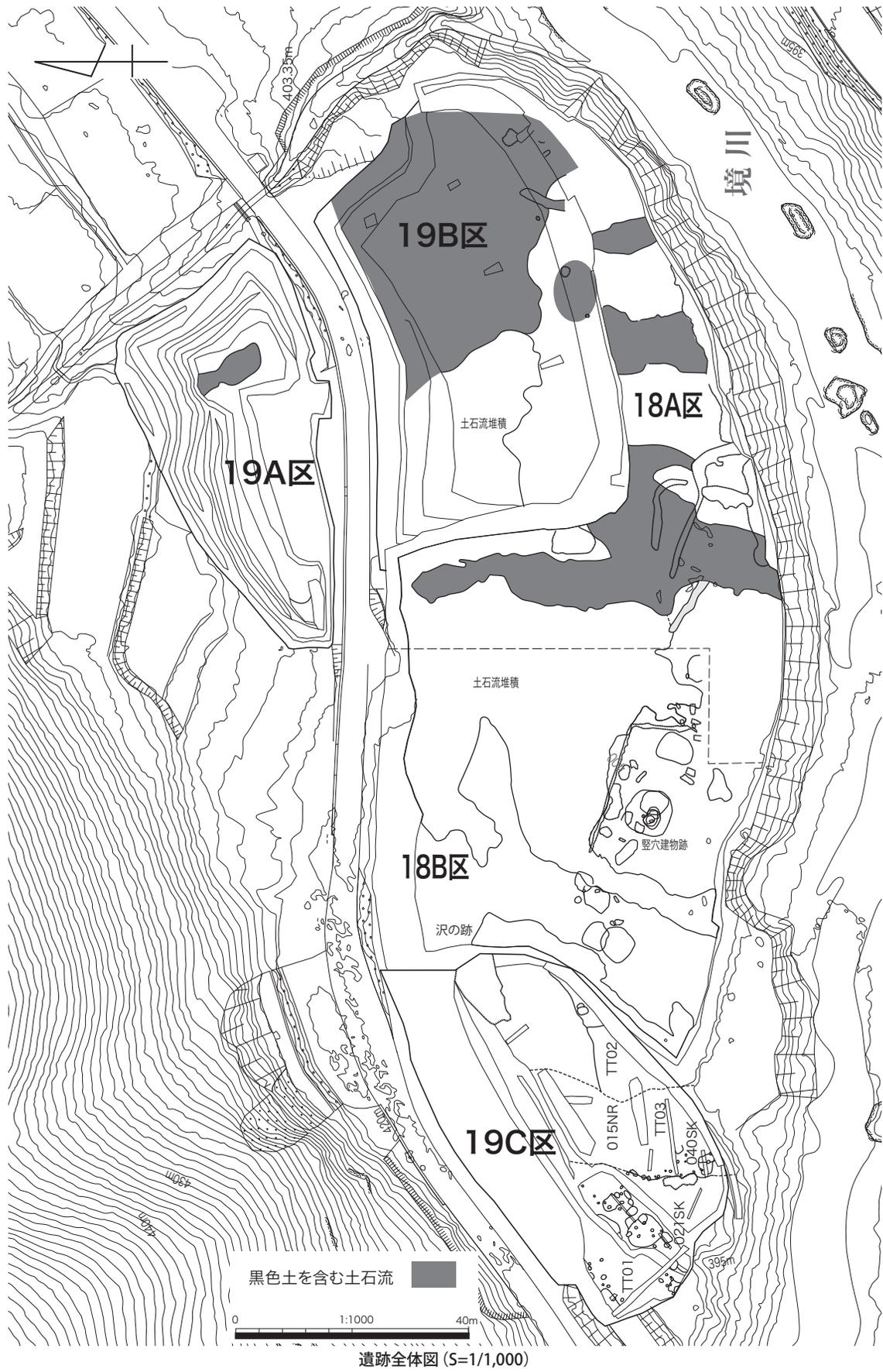
19A区 19A区は幾重にも重なる土石流が調査区全体を覆っており、東側では層の厚さが1m以上で、直径1m以上の巨礫が含まれる大規模な土石流が確認された。それらの土石流の下層からは、摩滅した縄文土器片や石鏃などが見つかった。

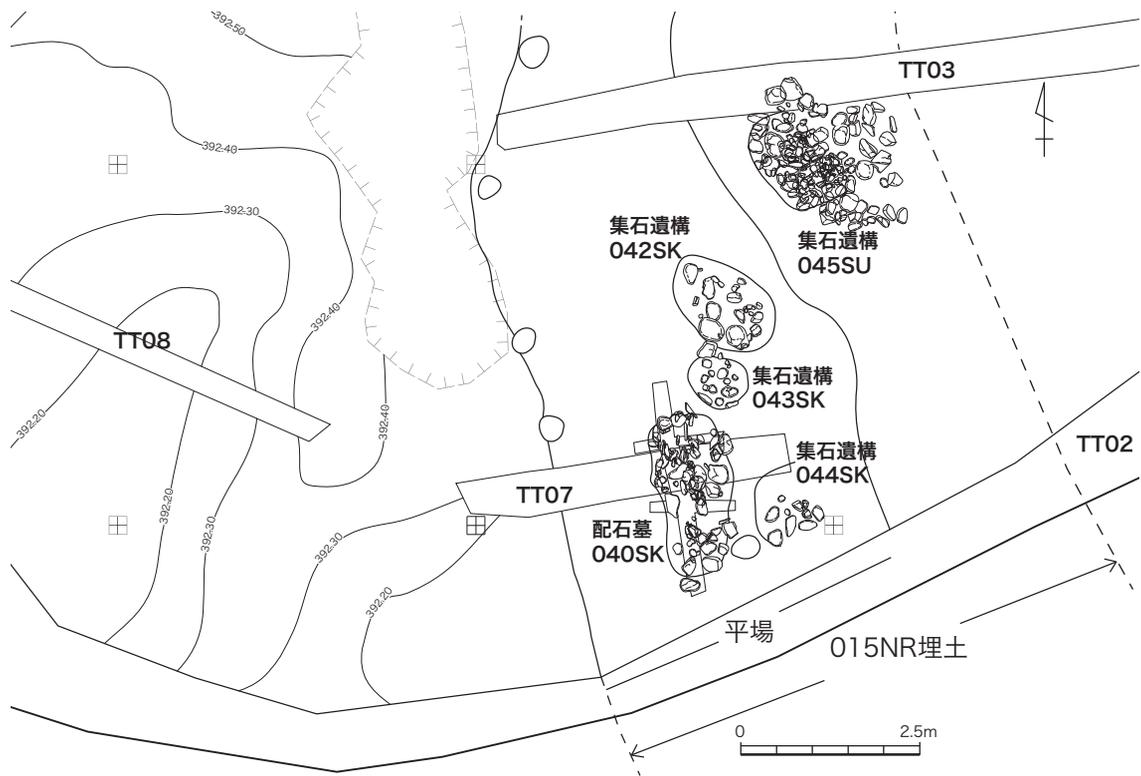
19B区 19B区は、砂層が19A区と同様の土石流に覆われている。その土石流が比較的薄い南側では、砂層が堆積している部分で、一部沈鉄混じりの二次堆積と思われる黒色土が堆積しており、そこから摩滅した縄文土器片や数点の黒曜石を含む剥片などが合わせて30点余り出土している。

19C区 19C区は、土石流と造成により、上・中段が大きく土地改変が行われている。その改変が及んでいない下段では縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての谷地形と黒色土の遺物包含層と配石墓などの遺構が検出された。

021SK 土坑(021SK)は、長さ2.35m幅1.45m深さ0.55mである。この土坑からは、摩滅した土器片や石鏃、剥片などが10点ほど出土し、黒曜石製のものが半数を占める。中段の遺構としては多くの遺物が出土している。

015NR 谷地形(015NR)は、縄文時代後期末から縄文時代晩期の包含層(黒色土)と、縄文時代晩期から弥生時代前期の包含層(暗褐色土)が堆積している。谷地形の大きさは、南北約20m、東西約15mとなるが、半分以上が土石流によって壊されており、黒色土と暗褐色土の遺物包含層が良好に残っている範囲は右岸域長さ約7-8mの範囲である。この谷地形からは、煤の付着した土器片が大量に出土しており、そのほとんどが煮炊きに使用されたと考え





谷地形015NRとその周囲の遺構(S=1/50)



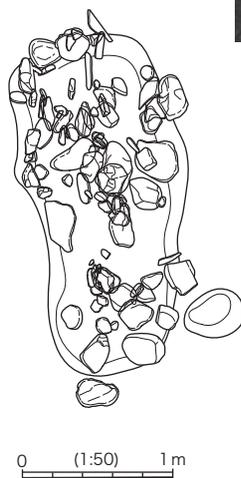
北側の掘り方(西から)



040SK検出状況(東から)



北西側の掘り方土器出土状況(西から)



配石墓040SK(S=1/50)



040SK完掘状況(北から)

られる。また、土器の出土傾向から、トレンチ(TT03)の辺りを境いに上流域部に弥生時代前期の条痕文土器が多く、それより下流域部ではほとんど出土していない。縄文時代晩期後葉の突帯文土器は015NRに広く分布しており、全体の土器の半分以上の割合を示す。縄文時代晩期中葉以前の土器は、ほとんどが下流域部で出土しており、配石墓(040SK)の掘り方には縄文時代晩期初頭以前の包含層が残っていた。このことから、包含層が形成される過程にも時期差があることが判明した。015NRの包含層が形成される以前の状況は、平場となっており土坑が数基掘り込まれているが、積極的な利用はされていない。周辺の遺構の状況から考えると、土器の廃絶が一時的に止まった段階で、配石墓040SKや集石遺構042SK、043SK、044SK、045SUが構築され、煮炊きなどが集中的におこなわれ、再び廃棄が継続したと思われる。集中的に煮炊きなどで利用していた時期は、土器の出土量から縄文時代晩期後葉と考えられる。

出土した石器は、打製石斧や磨製石斧、礫器、磨石、敲石、台石などの加工具が多く、石鏃は10点以下と少ない。このような石器組成の偏りからは、植物質食料を積極的に利用していたことが伺える。この点は、土器の内面に付着した煤の分析と合わせて検討することで、当時の人々の食性やこの地で何を煮炊きしていたのかより明らかになると思われる。

040SK 配石墓(040SK)は、石が縦向きに2列配石されており、埋土に骨片や骨粉を含んでいることから配石墓であると考えている。長さ2.45m幅1.1mで、縄文時代晩期初頭の土器を含む包含層を掘り込んで構築され、埋土中から突帯文土器が出土していることから、縄文時代晩期後葉以降のものと考えられる。

042SK 集石遺構とした(042SK・043SK・044SK)は、被熱した礫を含んでいる。015NRの埋土(黒色土)中に構築されており、掘り方が確認出来なかった。黒色土中には片麻岩の垂角礫や垂円礫が多く含まれているため、人為的な遺構ではない可能性もあるが、被熱した礫や安山岩が構成礫に含まれているため、集石遺構と考えている。掘り方が不明瞭であるのは、黒色土が堆積していく過程で、掘り込まず、地面に配置したためだと考えている。出土している土器と共に煮炊きに利用されたと考えられる。

045SU 045SUは042SK・043SK・044SKと同様、被熱した礫を含む集石遺構と考えられる。辺り一面に礫が堆積しているが、045SUに棒状の垂角礫や被熱した礫が含まれていたため、一つの集石遺構として捉えた。045SUを構築する礫は、他の集石遺構よりも大きな礫が利用されている。

ま と め 今回の調査では、昨年度とは異なる時代の遺構や遺物が検出された。中でも、昨年度調査区の18B区は、縄文時代中期前半の竪穴建物跡とそれに伴う遺物が出土していたが、隣接する19C区ではそれよりも新しい、縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての遺構や遺物が検出された。この全く異なる時代の遺跡が展開していたことは、当時の人々の生活環境を考察する上で、重要な事例となるであろう。また、19C区の谷地形(015NR)は、縄文時代後期末から弥生時代前期にかけて形成されているため、当時の人々がこの近辺に継続して居住していた可能性が高い。土器の廃棄量から推察して、あまり遠くない場所に集落が形成されていたと考えられるため、今後の調査で発見されることが期待される。

(田中 良)



石原遺跡全景(19A区調査時)



19A区全景(南東から)



19B区全景(南から)



19B区南壁(北から)



19C区全景(東から)



谷地形015NR 黒色土検出状況 (南から)



谷地形015NR 土層断面TT03 (南西から)



谷地形015NR 遺物出土状況 (北から)



040SK 完掘状況 (南東から)



042・043SK 検出状況 (東から)



044SK 検出状況 (東から)



045SU 検出状況 (西から)



谷地形015NR 完掘状況 (東から)